

エレミヤ書 15章 15-21節

ローマの信徒への手紙 12章 1-8節

マタイによる福音書 16章 21-27節

先週の福音書は、ペトロが信仰を告白し、イエス様から天国の鍵を授かる約束を受けた個所でした。しかし、マタイ福音書は、ペトロがその時点ですでに、イエス様の十字架のことをしっかりと認識していた、と描いているわけではありません。本日の箇所、イエス様が死と復活を予告した時、ペトロはそのことを理解できなかったからです。

本日の福音書のはじめに、イエス様は「**ご自分が必ずエルサレムに行き、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた**」（マタイ 16：21）とあります。このイエス様の告知は、物語の流れの中では、未来に起こる受難の予告です。しかし、それを読んでいる理解している教会にとっては、この告知は、宣教・福音の原点、言い換えれば教会の原点です。教会は、何を基にして成立したのかと考えたとき、それは、「イエス様は復活した」、そこから始まったからです。

先週の物語の中で、「**あなたはメシア、生ける神の子です**」（マタイ 16：16）と正しい答えをしたにも関わらず、ペトロが間違ってしまったのは、まさにこの点でした。本日の物語でペトロは、イエス様をわきへ呼んで、「**主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません**」（マタイ 16：22）といさめます。ペトロは、イスラエルを救う英雄が「苦しみを受けて殺される」など、あってはならないと思ったのでしょうか。あるいは、イエス様の時代、すでにファリサイ派の人々の間でも、死者の復活については議論となっていました。ペトロは信じていなかったのかもしれませんが。そのようなペトロに対するイエス様の答えは、非常に厳しいものでした。

「**サタン、引き下され。あなたは私の邪魔をする者だ。神のことを思わず、人のことを思っている**」（マタイ 16：23）。ここには、マルコにはない言葉「あなたは邪魔をする者」という表現があります。「邪魔」と訳されている言葉は、他の箇所では「つまずき」と訳される言葉です（マタイ 18：7）。直訳すれば「あなたはわたしのつまずきである」となります。「サタン」呼ばわりも厳しい批判ですが、「つまずき」だという表現も非常に厳しい批判です。その理由も、「**神のことを思わず、人のことを思っている**」からです。

ペテロは「**あなたはメシア、生ける神の子です**」と信仰を告白したのですが、それは、人のことだけを思ったら正解だったのですが、主なる神様のことを考えたときは、間違っていました。つまりイエス様の力だけに注目してしまう、奇跡を起こせるイエス様の強さだけに注目してしまう時、人間は大きな間違いをする。イエス様はその点を批判しているのです。

イエス様のような、人の病を癒す力や悪霊を追放する力に、何の問題があるのか、そのような問いも起きると思います。人を助ける力ならば、よい力だと思えるからです。しかし、その力を用いた先に本当に救いと平和があるのでしょうか。また、『聖書』の世界では、強い力を持っているのは、イエス様だけではありません。サタンも力を持っています。歴史を振り返れば、たった一人の人間でも、権力などによってとてつもない力を持つ場合があります。そのような力と同じ対象とイエス様を見てしまう時、イエス様を通して、主なる神様が何をなさろうとしているかを、理解できなくなってしまうのです。

マタイの物語の中でも、12章22節～24節に次のような描写があります。「その時、悪霊に取りつかれて目が見えず口の利けない人が、連れられて来て、イエスが癒やされると、ものが言え、目が見えるようになった。群衆は皆驚いて、『まさか、この人がダビデの子ではあるまいか』と言った。しかし、ファリサイ派の人々はこれを聞き、『悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ、この者は悪霊を追い出せはしない』と言った」。ファリサイ派の人たちは、イエス様を理解しませんでした。同時に不思議な力を持つ存在は、主なる神様の側だけではないと、力に関して慎重に判断していました。なぜ力だけで判断してはいけないのか、それは主なる神様がこの世界にイエス様を遣わされたのは、そのような力を示すためだけではないからです。

主なる神様が、イエス様を通して示そうとされていること、それは初めてこの世界に登場した事柄ではありません。主なる神様が、イスラエルを通して、それまでも世界に示し続けてきた事柄です。それは一言で言えば、「愛」にほかなりません。「力」ではないのです。しかし、この点純な答えを、人間は、なかなか理解することができないのです。また理解できたとしても、具体化することがなかなかできないのです。それゆえに、そのような人間に多しいて、イエス様の言葉、「私に付いて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を負って、私に従いなさい」（マタイ 16：24）が響きます。イエス様を信じる人たちが、イエス様の姿から、自分に示された十字架を背負って歩み始めるとき、その一人ひとりの歩みから、愛が広がり、具体化され、世界にそれが満ちるからです。そのような人々の集まりが教会です。教会の原点が、イエス様の十字架と復活にある、そのように述べた通りです。ただし、自分の十字架を自覚した歩み、その歩みには不安が伴うと思います。どうしても力にたよってしまう人間の判断では、決して納得できないことも多いからです。そのようなわたしたちに、「よく言うておく。ここに立っている人々の中には、人の子が御国と共に来るのを見るまでは、決して死なない者がいる」（マタイ 16：28）この時間と空間を超えたイエス様の言葉が、希望をあたえます。その希望を信頼するからこそ、わたしたちは歩み続けられるのです。これから様々な秋の行事があります。久しぶりのもの多くあります。その一つひとつを通して、主なる神様の愛が示されればと思います。